

ドーマン博士も認めた漢字教育の素晴らしさ

アメリカのグレン・ドーマン博士といえば、幼児教育に関心のある方なら誰でも一度は耳にしたことのある名前だと思います。博士と、彼の主宰する「人間能力開発研究所」のスタッフは、脳障害児の治療とともに健常児の能力開発でも画期的な成果を上げて、世界的にも知られるようになっていきます。

昭和46年のことです。ドーマン博士の著書である『ドーマン博士の幼児開発法』が日本で刊行され、その一冊が私のところに寄贈されて



グレン・ドーマン博士とともに

(人間能力開発世界会議にて・左から2人目が著者)

きました。その前年、たまたま同じ出版社から『漢字による才能開発 三歳からの漢字教育』という私の本が刊行されていたためです。

これを読んで私は驚きました。なぜなら「文字はワードで教えれば三歳児でも覚える。アルファベットから教えているので文字が難しくなるのだ」「Aからはじまるワードをいくつか教えてからAを教えるべきである」と、従来の文字学習の順序は逆であることを指摘しているではありませんか。この考え方は「文字は漢字から教えるべきである」「漢字をいくつも教えてから、かなは教えるべきである」という私の考え方と同じです。

このことをリーダーズ・ダイジェスト社の知り合いに話すと「面白い。ドーマン博士を日本に招待しよう」という話になり、リーダーズ・ダイジェスト社と、当時、井深大氏が理事長を務めていた幼児開発協会との共催で、翌年、ドーマン博士を招待しました。

初めて会った博士は、私の実践課程や結果について、一々熱心にうなずいてくれて、賛意を表してくれました。このとき、博士は「アルファベットを教える前にワードから先に教えることが、人々にどうしてもわかってもらえない」と嘆き「これだけわかってくれる人が多い日本がうらやましい」と言いましたので、私は「二人がほとんど同時期に発見した教育原理だから、これを“石井・ドーマン方式”と名付け、協力してこの方式を世界に広めよう」と提案しました。すると、博士はすぐに「賛成。しかし“ドーマン・石井”という呼び方のほうがよいのではないか」と笑って答えました。

この初来日の際、私は各地の講演会にも同行し、講師紹介役を務めたことが縁となって、博士は度々来日されるようになりました。

また、昭和48年5月、フィラデルフィアで第6回人間能力開発国際会議が開催された折には、ドーマン博士のお宅に5日ほど泊めていただきました。通りを隔てた向いに小学校があります。「私の研究所の子どもたちは皆、脳障害者であるが、三歳児でも本がすらすら読める。しかし、向いの学校の子どもたちは、六、七歳でもうちの三歳児ほど本を読めない子が多い。脳が健全だと文字が覚えにくいのだろうか」

博士が笑いながらそう言ったことが今も心に残っています。

「英語のワードよりも、日本の漢字のほうが覚えやすく、脳の発達にもよいと思うがどうか」と私が博士に問うと、すぐさま同意を示してくれました。そして、その数年後、博士の研究所を訪問したときには、明り障子の和室が作られていて、ロッカーの中に可愛い子ども用の着物が何枚も衣紋えもん掛けに掛けられていました。

青い目のアメリカ人の幼児たちも、漢字を学習するときには、和服に着替えて学習するのだそうです。私はこのとき、アメリカ幼児教育視察団の団長として日本の幼稚園の先生たちを案内していたのですが、多くの先生方が、これを知ってたいへん感激していたことを今でもはっきりと覚えています。